

学生の討論におけるスピーチレベルシフト

——丁寧体と普通体の現れ方——

杉山 ますよ

1. はじめに

最近「ため口」が話題にのぼることが多い、「ため口」というのは相手と友達口調で話すことである。陣内⁽¹⁾によれば、目上にため口を使うことは20年ぐらい前からテレビドラマ「金八先生」をきっかけに中学生らを中心に広まり、教師と生徒が友達口調で話すことが親密さの現れと受け止められ始めたそうである。ところが現在は学生のみならず、店員がお客に使ったり、社員が会議の場で使う現象が若い世代を中心に現れ始めているそうである。あるニュース番組で取り上げた例は原宿辺りのブティック店員の「ため口」である。その店員は「ため口」で若い客と話す。店員はこのほうが彼らは親しみをもってくれると言い、一方若い客は親しみを感じ、気軽に相談できていいと言う。しかしその店員も彼らが親と来たときは敬語を使うそうである。結局その店員は若い客が一人の場合の時と親を伴っている時の状況の違いに応じて使い分けていることになる。またある新聞で取り上げられていた話では、企画会議で自分のアイデアを主張する際や自らを印象づけようとする時などに、いわば戦略的に「ため口」を用いるのが特徴だという。「敬語を使う時と同じくらい意識しながら、目上にため口を駆使している」というコメントもあった。このようにスピーチレベルを変えることが現行場面で行われている会話において何かしらの影響があるようだ。本研究では学生同士の討論場面での会話をとりあげ、どんな条件の時にどのようなシフトがみられ

るか、そしてそのシフトが生起することにより、どのような効果、働きがあるのかを探る。

2. 先行研究

スピーチレベルシフトの研究はいうまでもなく敬語の使い分けにも関わっている。井出（1999）は敬語の運用は従来上下、親疎関係を区別し、場面の改まりを示すものとされてきたが、最近は上下関係を役割関係に親疎関係をウチ、ソトの関係というように再認識されてきていると述べている。上司の「これやっといてくれ」の発話の応答として部下の「はい、わかりました。」という会話を例にあげ、常体と敬体の使い分けは役割に応じたものであるとしている。そして吉田（1996）は井出、他（1986）に従い、感謝表現の相手による使い分けが丁寧体の相手をソト、普通体の相手をウチとして認知するという指標的機能によることを示している。一方教室談話の研究として茂呂は方言と共通語の使い分けをレジスターとしており、教師に指名された生徒が起立しての発話を「公的」なものとし、着席時に隣の生徒への方言での発話を「非公式」なもの指摘している。また岡本（1997）は教室場面における文体シフトを指標的機能の具現化としてとりあげ、丁寧体は公的場面、普通体は非公式場面に現れ、また教師は丁寧体によって生徒の発話を制御し、普通体によって引き出すとしている。

足立（1995）はテレビのインタビュー番組に見られる丁寧語と尊敬語のシフトを分析し、スピーチレベルシフトを起こす条件を3つ指摘している。会話の始まる前の条件、社会的条件を第1条件、次に会話における心理的条件を第2条件、文脈的条件を第3条件としている。宇佐美（1995）の研究は同一話者の同一会話内におけるスピーチレベルシフトに着目したもので、尊敬語・謙譲語および丁寧体から常体への発話へシフトが生じるローカルな条件を次のように5つあげている。①心理的距離の短縮、②相手のマイナスレベル（常体）に合わせる時、③独り言、自問する時、④確認のための質問、あるいは答える時、⑤中途終了型発話の時。常体から敬語へのシフトの条件は3つあげている。①常体の発話から基本である敬語使用のレベルに戻る、②新しい話題を導入する時 ③新しい話題を導

入する質問に答える時である。グローバルな条件としては足立の第1条件と同様のものをあげている。また森下(1998)は行政機関がその場面を管理するボランティアグループのミーティングと行政機関が関わらないミーティング(司会者もそのメンバーの者が行っている)の2つのミーティングにおけるシフトに焦点を当て比較し、そこではシフトによって司会者という立場からミーティングの参加者の一人としての立場というようにアイデンティティの移動がおき、一方で談話課題管理においても効果があげられている。牧野(1996)は常体と敬体をウチとソトの関係でとらえ、ウチ向きは話し手向き、ソト向きは聞き手向きとしている。丁寧体の使用が圧倒的である座談会の場面をとりあげ、その際の常体への変換の例として、ある事柄が発話者の中で固定化したイメージのようにになっているか、長い間考えて確信のようなものになっている場合に変換がみられると述べている。また村上春樹が常体中心で書いている小説でところどころ敬体に変わっている例をあげ、それは急に読者を強く意識し、話しかけたくなった部分であるとしている。さらに日本語教育では作文などでウチ型、ソト型で統一して書く指導をしているが、母語話者は必ずしも統一して書いているわけではなく、書き手のある意識においてウチ型にソト型が、逆にソト型にウチ型が現れたりしている。その事実に触れずに指導していいのだろうかとの疑問を投げかけている。

本研究では以上の先行研究を踏まえて丁寧体から普通体へ、普通体から丁寧体へのシフトの両方向から分析を行う。

3. スピーチ・レベル・シフト

スピーチレベルシフトとは文体が変換することをいう。前述した先行研究で扱っているシフトは岡本は丁寧体(です・ます体)と普通体(常体・ダ体)、足立は丁寧語と尊敬語とのレベルシフト、宇佐美は尊敬語・謙譲語、丁寧体から、常体のシフト、森下は丁寧体(です・ます体、尊敬語・謙譲語も含む)と普通体とのシフトである。本研究では同じ大学の同じ学部へ属する学生同士の討論を分析することから、レベルは普通体が中心で尊敬語、謙譲語の出現はあまりみられないと思われるので、丁寧体(です・ます体の他に尊敬語・謙譲語を含む)と普通体

の2つのレベルでとらえる。

4. 研究方法

データはある大学の授業に参加する学生、男性2名女性2名を1つのグループとして11のグループからとった。課題を3つ与え、それについて15分程度で話し合ってもらった。あらかじめ、テープレコーダーをセットしておき、開始、終了は学生に任せた。録音したテープを丁寧に文字化したものを分析資料とし、また補助資料としてその際に行ったアンケートによるグループのメンバー間の親しさの情報も資料として一部参考にする。

* 文字化の記号の説明

アルファベット：話者

X, Y：各グループの男性話者 A, B：各グループの女性話者

F：特定できない女性話者 M：特定できない男性話者

数字：発話番号

〇〇：固有名詞

～：省略

[：発話の重なり

5. 分析及び考察

普通体から丁寧体、また丁寧体から普通体へシフトする場面をすべてひろい、その出現がどのような条件の時に生起しているかに焦点を当ててみる。丁寧体、普通体の会話における継続についても考慮して観察する。

5-1 公的場面と非公式場面

丁寧体は発話者が現行場面を公的な場面としてとらえている場合に多く使用が見られ、一方現行場面を非公式ととらえている場合は普通体が現れるということが一般的に言われている。岡本は、教室における生徒の普通体の発話は、指名されず一個人として不満を述べたり隣の生徒に話しかけたりする発話場面、丁寧体

の発話は、指名によって発言権が与えられた「生徒」として、教師と他の生徒に対しての発話場面に見られることを指摘した。

学生の討論場面でも、話し手が討論という公的場面を意識した際に丁寧体による発話が見られる。討論という形式では課題の検討を開始し、しかるべき時間の経過の後に、終わらせなければならないというフレーム⁽²⁾があり、そのために儀式的にシフトが現れていると考えられる。学生同士の話し合いということで基本は普通体であるので、儀式的なシフトの後で基本に戻る際や、冗談や独り言や、メンバー全員に聞かせる発話ではなく、より親しいメンバーに対する、個人的な質問や話をするような非公式な場面に出現していた。

丁寧体へのシフトをみていく。

開始

開始以前は内輪的な発話もみられることもあるが11グループ、どのグループをみても討論開始となると、メンバーは公的場面を意識し、改まった丁寧体で討論が始まる。自己紹介から始まり、続いて課題の提示がなされるケースがほとんどである。

例1]

1X：日々の3年2組のXです。(日々は学部の省略)

2A：日々の2年のAです。

3Y：日々3年のYです。

4B：日々2年のBです。

例2]

1Y：どうしてXX大学の日々を選んだんですか。X君。

2X：えーと、なんだろう、XX大学の文系だったらどこでもよかったというか、推薦なんで・・・日本語と日本文化どっちにも興味があったから、どっちも学べそうなんで、ここにしました。

例2で急に質問から開始したのはなぜだろうか、これは進行役を意識したYがメンバーを知ってることから、開始したことによると思われる。アンケートを見

ると確かに、Yは他のメンバー全員を知っているとしている。

例1では全員、丁寧体の同レベルを用いて自己紹介をし、例2では第1課題を丁寧体で提示している例がみられる。例1、例2とも討論の始めということで、きちんとした出だしが見られる。始めから普通体の使用が多くみられたグループはメンバー同士が各々親しい度合いが高いグループであった。

次の課題への移行

同一課題内での関連話題への移行とは異なり、次の課題へ移行するということは公的な行為である。藤井・他(1998)の「日本人は参加者が共同で手順を踏んでトピックを移行させる」との指摘からも公的場面として移行をとらえる可能性が示されていると考えられる。これが公的な行為であるならば、当然丁寧体へのスピーチレベルシフトがみられることが予想される。

例3]

1X: そうなんだよね、むかつく、むかつく。中国人や韓国人でいきなり中国語とか韓国語で言ってくるやつはいないけど、いきなり皆英語で話しかけてくるのにさあ、

2A: そうなんですよねえ。

ポーズ(8秒)

→3X: では、いい具合にまとまったところで(笑い)脳死について結論を出すという問題なわけですが。

4Y: 僕は、あのう、脳死を人の死とするのは嫌なんですけど。

1Xでは普通体で話しているが、8秒のポーズの後でもうこれ以上何も話すことがないと認識したあと進行役であるXは「では、いい具合にまとまったところで」という発言で2つ目の課題の終了を宣言し、最後の課題を参加者全員に丁寧体で提示している。

討論終了

それまで普通体で会話をしているも、全体の討論の終了時にはポーズやまとめ

の発言の後に、終了確認または終了宣言を丁寧体で行っている。

例4]

1X: ひょっとした、[ひょっとしたという[のは、あるかも知れへんから。

2Y: [うん [うん

3X: うん

4Y: それが大きい・・・[何をやるか分からんというのが[大きい。

5X: [うん [うん

6Y: うん

(ポーズ)

→7A: 一応、じゃあ、結論は脳死は人の死、法律で決めることも必要ということ
でいいですか。

8AB: はい。

→9X: じゃあ、終わりましょう。終わりませう。

6Yまで普通体できた会話が、7Aで丁寧体にシフトし結論を提示、メンバー全員に承認を求めている。その後メンバーの「はい」という承認の返事をえて、さらに9Xで終了宣言を丁寧体で行っている。

他に終了を宣言する表現としては「いいですね」「まとまりました」「終わりました」「以上です。ありがとうございました」などがあつた。

このように全体の終了においては丁寧体にシフトして討論が終結している。時間ぎれの1グループを除き、10グループすべてに丁寧体へのスピーチレベルシフトがみられた。討論終了ということは討論のフレームの終了部分であり、討論参加者の全員が関わり、その場面は公的な度合いが非常に高いことから、丁寧体にシフトしているものと思われる。

同一話者の意見の開始→終了

討論全体の始めから終わりまでの流れの中でみられる普通体と丁寧体の相互のスピーチレベルシフトみてきたが、個人の発話の中でも同様の現象がみられる。個人の意見をきちんと述べる、つまり現行場面を公的場面ととらえ他のメンバー

に自分の意見をきちんと聞いてもらう、あるいは聞かせるという意識をもって話すとき、長めのシングルフロアー⁽³⁾によく丁寧体が見られる。会話の途中は普通体で展開することが多いが、丁寧体にシフトするパターンとしては①会話の出だし、②会話の出だしと終わり、③会話の終わりに丁寧体がみられる傾向があった。

例5] 出だしのみ丁寧体

1B: うん、私も自分だったらいいと思います。ただ、肉親の立場として、[まだ、体温もある人を、そういうふうに死人として

2A: [うん

3B: 扱われるのが、やっぱり、ちょっと納得できないっていうか、割り切れないっていうんで、多分問題になってるんで

Bは始めに意見を丁寧体で述べ、あとは「ただ」といって関連説明を普通体で行っている。

例6] 始めと終わり

A: えっ、でも私もこれは、賛成です。理由はやっぱり必要性がそこまでない国だと思うんで、日本っていうのは。だから、そんなに、趣味とか自分の興味がある人は、外国語、いっぱい習得できると思うけれども、必要性がそこまでない人にとっては、苦手かもしれないと思います。

始めに意見を丁寧体で言い、理由、説明を普通体で、最後に結論を丁寧体で述べている。

例7] 終了時のみ丁寧体

A: 私も苦手っていうのには一反対で・・・うん、やっぱり動機とか、環境とか・・・の、違いだと思うから。・・・こう、やる気さえあれば一苦手ってそんなことには縛られる必要はないと思うから、別に苦手ではないと思います、日本人も。

出だしでは言う内容を考えながら言っているので、意見が中途終了型発話となっている。最後の結論部分のみを丁寧体を使って結論を述べている。

以上述べたように学生同士の会話でも「討論」というフレームが与えられた場

合は始めと終わりには丁寧体へのスピーチレベルシフトがどのグループにも出現している。討論の場ということで儀礼的な型が影響したものと思われる。それ以外の話の展開には普通体が多く出現している。

進行に関するやりとり

例 8] (Yが朝鮮語を授業でとっていることに対する質問)

1B: 今年もそうですか。

2Y: はい、

3B: あ、そうですか、

ポーズ

→4Y: なるほどね。

ポーズ

→5B: これ全部やるんだよね

6Y: これひとつだけやる?

7A: いや全部じゃない、3つのトピックについてとか

Bはこのグループで進行役を演じており、質問によって話を進行させている。

ポーズの後、これまでの課題についての話を一時的にストップして進め方について普通体にシフトして質問し、他のメンバーも普通体で話に加わっている。ここでは課題に関する話を公的なものととらえ、本来の話の流れから外れた、進め方に関する話は非公式場面ととらえていると思われる。

5-2 立場/役割の変化

前述したように、敬語が示すものは上下関係ではなく役割関係による使い分けであるという見方が現れているが、森下は、日本語のボランティアの会議において、メンバーのひとりが司会者を兼ねているグループでは、その人が丁寧体で行う発言は司会者としての立場のもので、「議題の提示、まとめ、ターンの配分」などの談話管理の使用であるが、同一人物による普通体の使用も存在し、それは「自分もボランティアの一員だというアイデンティティを示す」ことによって心

理的距離を縮め、他のメンバーの発話を促すとしている。また教室では教師と生徒という立場は絶対的であるものの、教師は普通体を使うことによって生徒と心理的距離を縮めその発話を促したり、また丁寧体へのシフトにより教師の立場を鮮明にし、生徒の発話を抑制するという。ここでは全員同じ学部の学生であるが談話の流れのなかで、学生と進行役という役割の変換によってシフトがみられた。話し合いの始めに進行役を決めてから討論を始めたグループもあったが、他のグループも必ず一人は進行役が、時には複数の進行役が存在していた。これはあらかじめ決められたものではなく、自然発生的に生じたものである。また彼らもグループの一員として発言する場合は普通体へもどっている。

例9]

A: ~と思う。ポーズ～終わりです。ポーズ・次は脳死を人の死と法律で定めることをどう思いますか? 議論しましょう。ポーズ・難しいよ、これ、難しい・脳死ってことは内臓がまだ動いてるってこと?

Aは意見を述べた後、進行役的な発話「終わりです」という第2トピックの終了の宣言を行い、次ぎに第3トピックを提示し、ポーズが入り普通体に戻り、「難しいよ、これ、難しい」と個人に戻っての独り言、そして事実確認を行っている。このように進行役に変換するときに普通体から丁寧体へとスピーチレベルがシフトし、メンバーの一員であるという意識に立つ時は普通体にもどる。11グループ中8つのグループの進行役はこのようなシフトを行っている。

5-3 談話管理

「立場/役割の変化」のところで述べたように、授業では教師、ミーティングでは司会者、討論では進行役がその場の進行を管理する際に、丁寧体から普通体、普通体から丁寧体へのシフトにある種の効果がある。

発話の促進/発展

茂呂は方言レジスターによる教師の発話が生徒の自由な発想を引き出し、発話が広がっているとし、岡本は教師の普通体の使用が教師が生徒と同じ側、つまり

ウチの側であるとのメッセージを伝え、教師と生徒の心理的距離を縮め、生徒の発話を促す効果をあげていると指摘している。

討論場面でも発話の促進が普通体によってなされている場面が見られた。

例10]

1X: そう、自分が脳死になったらどうでしょう。

ポーズ (2秒)

2X: どう思います?

ポーズ (1秒)

→3X: 脳死になって、意識があったら、地獄だよな。

4F: (笑い)

5Y: そういふのがあったらいいよ、そういうなんか目ん玉取り出して、

脳死の人が～ なんか倫理の授業かなんかでやって～

Xは1Xで他のメンバーからの発話を要求したが、沈黙が生じた。それによりさらに2Xの発話で皆からの発話を要求しているが、また沈黙が生じた際に3Xで普通体を用い、冗談らしきコメントを述べている。これによって笑いが生じ、さらに5Yの発話が生じている。停滞ぎみの会話を促進させてるのである。このような発話は他グループの進行役を演じている学生にもよくみられる発話であり、役割意識が働いていて、談話を管理しているものと思われる。

発話の制御

進行役が討論の開始、課題の提示、終了に携わっていることは述べたが、この場合は丁寧体へシフトすることによって現行場面を公的な改まった場として他のメンバーに意識させ、その場を管理している。その場合は沈黙の存在（何も話すことがないことの確認）や課題の終結を確認しあったりする際に、進行役は独断ではなく、なるべく多くの参加者の承認・同意を得たうえで課題を終わらせる。参加者の課題移行、終了の際にも丁寧体が現れる。例は5-1を参照のこと。

5-4 心理的な変化

スピーチレベルシフトの生起は心理的なものからの影響が非常に大きいと思われる。反論や訂正、主流の意見ではない意見を提示する際に丁寧体へのシフトがみられた。これは相手の発話に対して、反論したり訂正したり、他のメンバーが興味をもっているかもしれない現行の話題を変えることは相手の面子⁽⁴⁾を脅かす、あるいは傷つけると考えられているからだと思われる。そのため丁寧体にシフトすることにより内容と聞き手から距離をもち、発話に客観性を持たせ、面子を脅かす危険をやわらげる。つまり丁寧体を用いることは相手の自尊心(面子、メンツ)を傷つけないように配慮した発話となる。一方普通体を使うことで心理的距離を縮め、共感を示す。また教室談話では教師が普通体で話すことで生徒側に立ちウチ意識を持たせ、それにより生徒は心理的に教師との距離を縮め、生徒の発話を誘発する効果をもつことがとりあげられているが、同様に、進行役を演じている学生が普通体を使うことにより他のメンバーと心理的距離を縮め、発話を促していた。

反論

例11]

1A: やっぱなんか習得っていったら、文章読むというか、何も引かなくても、
読める感じがするんですけども。

2X: そうかなあ

3A: ある程度何も引かなくても意味がとれるっていう感じがするんですが。

4X: 僕は日本人も外国人もないと思うんですが。

反論のし合いでA、Bともに自分の意見を主張するばあいに「ですが/ですけども」と丁寧体で反論している。

訂正

例12]

1X: でも、だって年齢下げていったら習得じゃなくて獲得になってる。

→2A : ええ、習得でいいんじゃないですか。

3X : あっ、習得でいいの？

1Xの発話内容を2Aが丁寧体で訂正している。それに対して3Xは意外な訂正であったので、驚いている。相手の発話を修正することは相手の面子をつぶす可能性がある。そのためAは丁寧体を使うことで距離をおき、発言をやわらげているのだろう。

強い対他／排他意識の現れ

普通体が基本の会話で丁寧体にシフトすることは、現行の場面においての何らかの変化ととらえることができる。文末まで「です、ます」できちんと言うことは普通体よりも時間がかかる。つまりそれだけ話し手が自分の意見を聞いてほしい、聞かせるという意識、あるいは明確に聞き手に自分の発話を理解させるというような意識がはたらいっていることによるものと思われる。牧野は普通体を中心として書かれている小説をとりあげ、その小説で急に丁寧体が出現する理由として、作者が急に読者を強く意識し、話しかけたくなかったからとしている。

例13]

1X : 一番やなのがですね。その一女性の前で話すような問題じゃないんだけど、これが（笑い）

ポーズ（5秒）

2X : いや、死にたくない瞬間であるじゃないですか。おふろに入っている時とかー、今死んだらいやだなーとか

3A : そりゃあ、やだよね。

4Y : そんなこと思う？

・
・（しばらく話が続く）

ポーズ（5秒）

5X : やっぱこの先倫理が科学の発達を妨げますから、だからクローン（不明）あれも決めなきゃあ。

6Y : クローン人間？

Xは丁寧体で話すことが多い、これは司会者としての談話管理のためではなく、自分の意見を主張し、自分の話したい話題を提供する時に多々出現している。この現象は例に取り上げた部分以外の場面でも多くみられ、聞き手に対する強い意識の現れと思われる。これに対して参加者はほとんど普通体でXの発話に応答している。

一方丁寧体主流の会話場面での普通体の出現については、牧野は普通体は確信のようなものに結晶して他人には崩せない固定概念の場合、聞き手オフリミットのような態度をとっている場合に出現していると指摘してる。この場合はやはり話し手の強い意識の現れと解釈できる。

配慮

宇佐美はスピーチレベルシフトの生起のローカルな条件のひとつとして②相手のマイナスレベル（常体）に合わせることを取り上げ、心的距離の短縮、つまり打ち解けたことを示すとしている。相手のスピーチレベルに合わせるという行為は、普通体、丁寧体に関わらず、相手に対する配慮の現れとも言える。討論では相手に合わせた丁寧体へのシフトが見られた。

例14]

1X : 痴呆はいいんだけど、管だらけの人はどうするかとかそういう話。

2A : え？

3X : 管だらけの人はどうするか。

4A : あー、管だらけの人。

5X : そうそうそう、そういう話のほうが、ぼくは好きですね。

→6A : そうですね。

7X : みんな甘いですからね、日本中。おれは確かに、最近こういう話ばかり
していて、みんなにあんたは頭おかしいのかと言われるけど、

全員 : (笑い)

1 Xから4Aまでは普通体で話がなされてきたが、5Xで丁寧体にシフトし、そ

れに合わせて、6Aの発話でも丁寧体へのシフトがみられる。7Xでまた主流のレベルである普通体にもどっている。これは普通体、丁寧体のどちらにシフトしたかが問題なのではなく、相手に合わせてシフトしたことが重要なのである。普通体にシフトしたから心的距離が縮まったのではなく、相手に合わせるという配慮と言えるのではないか。普通体へのシフトそのものが必ずしも心理的距離の短縮を意味するものではないと思われる。

ソト意識の現れ

さらに課題1、与えた3つうちの最初のそれが継続中は参加メンバー全員に丁寧体の使用が見られるグループが多く、11グループ中8つのグループにこのような現象がみられた。これは同じ学部の学生間の討論とはいえ、討論の始めであることから、改まりの意識がまだ継続し、面識はあるとはいえまだ心理的に隔たりがあるからではないだろうか。

例15]

1X：ええ、日本語教師になろうという堅い目標はありましたか。

2A：あ、ありました。

3X：今でもありますか。

4A：いえ、ありません。

(笑い)

1Xから4Aまでは丁寧体でXの質問にAが答えるというやり取りを行っている。例のように丁寧体の質問に丁寧体の答えの繰り返しで話が進む現象が多くみられた。

ウチ的意識、仲間意識の現れ

例16]

1X：まあ最初は簡単のところから、どうして〇〇大学の日々を選んだのですか？

Y：(笑い)

F : (笑い) (AかBのどちらか)

F : (笑い)

2X : ということで、じゃあ、まあ年の若い順ということで・・・はい。

AB : (笑い)

→2Y : おまえ、おまえずるいな。

AB : (笑い)

→4X : 俺一番年寄りなんだ (笑い)

Xはこのグループでは進行役を演じている。1Xで課題を述べ質問している。しかし、他のメンバーは笑いで発話権をパスしている。それに対して2Xは「まあ年の若い順ということで」と発話した後で若干の間をおいて「はい」と言って、次の話し手を指名している。ビデオ資料がないのでわからないが、Xは視線をYに向けて、あるいは手の動きなど非言語的な行為を伴って指名しているのではないだろうか。それに対して笑いが起こり、Yは「おまえ、ずるいな」と発言している。YのXに対し「おまえ」という呼びかけを用い、普通体で述べている。これはウチ意識の現れとしてとらえることができる。それに応答するXの「俺一番年寄りなんだ」という発言も普通体でされている。メンバーの関係についてのアンケートを見ると、XとYはお互いに非常に親しいとしていることから彼らはお互いにウチ意識／仲間意識を表出させていることが裏付けられる。

5-5 聞かせる相手の変化

岡本は丁寧体は公的発話、つまりクラス全体に聞かそうとする意識をもった発話、普通体は個人に向ける発話での使用としている。討論でみられたのはその他に、他のメンバーにも聞かせることを意識した個人に向けての発話が丁寧体でされていた。また牧野、宇佐美の両氏は独り言における普通体の使用をとりあげている。牧野は普通体はウチ向きで、独り言は話し手が聞き手も兼ねているとしている。宇佐美は独り言や自問をシフトが生起するローカルな条件の一つとしている。

独り言

例17]

1X：反対3人、賛成1人ということで、じゃ賛成意見から聞いてまいりましょう。

2A：ああ（笑い）

→3X：なんか、討論になってないぞ、これ。

4A：え、ちょっと待って、わたしもやっぱ賛成ですね。

このグループではXは全般的に進行役的な役割を演じている。1Xで進行に関する発話をした後で、3Xで普通体にシフトして独り言で「3つの課題について討論する」という指示にこだわってつぶやいている。

また話し手が独り言、自問の後に、また意識を聞き手に向け、他のメンバーに話題を提供したり、意見を求めたりするような公的な発話がなされる際は丁寧体にシフトする。

5-6 談話構造の変化

討論の新課題の提示の際に丁寧体にシフトがみられることは、5-1で述べたとおりである。また課題進行中に関連する小トピックへの変換の際にも丁寧体へのシフトが多々みられた。また個人の発話の中でも変換が生じる。これは「意見の始めと終わり」で指摘したように、意見や結論は主に丁寧体で述べられ、それに関連する事柄や説明、理由の提示や例証などは普通体で述べられることによる。また確認が普通体によりなされているという指摘が宇佐美にあったが、それは主要な話題の流れの途中でその内容をよりよく理解するために確認するには発話を簡潔にすることによって、会話のスムーズな流れを滞らせるのを最小限にとどめる機能をもつと記述している。これは相手の話に対する確認であるが、一般的な事柄に対する確認や自分でもっている情報の確認の際には丁寧体がよく見られた。これはその行為が新しい話題の提示になるからであろう。

確認

例17] 丁寧体の確認

1B : 脳死って治らないんですか？

2X : 今の医療では治らないし、見通しもたっていないと言われている。

ポーズ(4秒)

3T : そうですね、・・・多分そのうちだれかが治せるようになる。(不明)、
エイズとかだってそうだし、

1Bの確認の後、しばらく「治る」という話題で話が進む。

例18] 普通体の確認

1B : 結局、歩けるようになったんだって。

2Y : [すばらしい。

3A : [そういうケースも

4B : うん、ずーっとずーっと話しかけていたら、お風呂にいれてたりとか、
それから

5A : 脳死の人？

例18は相手の発話についての確認なので普通体でされている。この場合は基本の普通体で話していたのでシフトは起こっていない。

話題の変換

新課題の提示の際にも丁寧体へのシフトがみられたが、課題進行中での新トピックの提示の際にも丁寧体へのシフトがみられた。

例19]

↓

1Y : 移植しても、そんなに成功するわけでもないやろ。

2B : うん。

3Y : 成功率が高かったら、まだやり甲斐ある。

4S : うんん？

ポーズ

→5Y：献血した事がありますか？

6A：やろうと思ったら、できなかったんですよ。

7Y：え？、貧血ぎみで

8A：っていうか、何か比重が軽いか言って、やらなかったんですよ。

臓器移植問題を話していてポーズのあとで5Yで献血についての話題に変わる時に丁寧体へのシフトが起きている。

6. まとめ

まとめると表1のようになった。

表1 学生討論におけるシフトの条件と機能

シフト生起の要因	シフトの具体的な現れ方	
	丁寧体	普通体
①場面的変化	公的 (討論の開始、課題の移行、 終了/個人の発話の開始と 終了)	非公式的 (本来の談話の流れから外 れた進行に関する発話)
②立場/役割の変化	司会者	学生
③談話管理	発話の制御	発話の促進/発展
④心理的な変化	疎・遠 (反論/訂正) (配慮) (強い対他意識の現れ) (ソト意識の現れ)	親・近 (共感) (配慮) (強い排他意識の現れ) (ウチ意識の現れ)
⑤発話を聞かせる相手の変化	メンバー全員 メンバーを意識しての一人	メンバーの一人 話し手自身(独り言)
⑥談話構造の変化	新話題の提示 個人の発話内の構造 (意見・結論) 確認(自分の情報について)	個人の発話内の構造 (関連事項や説明、理由、例 証、下位事項) 確認(相手の発話内容につ いて)

今回とりあげた資料は学生同士の討論である。討論の場面は通常公的な場面で司会者が存在するフレームがあり、基本レベルは丁寧体であるが、今回は同じ学部の学生同士ということでもどちらかといえば基本レベルは普通体である。それを踏まえてまとめると、スピーチレベルシフトが6つの条件でみられた。「場面」、「立場／役割」は会話が始まる前の社会的条件に相当する。討論場面は公的、司会者は存在するというフレームがある。それにしたがって丁寧体、普通体の相互の変換はある種の機能が生ずる。討論談話においての基本の流れの部分（始まり、移行、終了）では丁寧体へのシフトが見られ、それ以外では基本の普通体に戻る傾向がある。また学生が司会者の役割を演ずる際は丁寧体の使用が見られ、また丁寧体、普通体のシフトにより談話管理を行っている。

会話におけるシフトの条件として表1に示したように話し手の何らかの心理的な変化により、また話し手の聞き手に対する意識の変化によってもシフトが生じていた。一方では談話構造の変化においてもシフトが見られた。1つの条件のみでシフトが起こるのではなく、通常はいくつかの条件が同時に存在すると思われる。また上の結果は今回の学生の討論によるものであるが、今回の調査だけでもスピーチレベルシフトは実にさまざまな条件により起こる。またその条件に基づくいくつかの効果があることがわかった。このように日本語母語話者はスピーチレベルをシフトさせることによって相手に様々なメッセージを送っている。しかし現在日本語教育においては学習者に対してスピーチレベルシフトの適切な指導はほとんどなされていないように思われる。

今後の課題としては公的状況が高いテレビ討論や逆に全く私的な学生同士の雑談などをとりあげ、今回の研究をさらに質的に高めたい。その結果が日本語学習者に対する適切なスピーチレベルシフトの指導、あるいは教材作成の基礎資料となり、日本語教育に貢献できるものとなることを念じている。

(注)

- (1)陣内：関西学院大学教授－言語学
- (2)フレーム：コミュニケーションの中で使われる言語に与える、何らかの限定、
枠組みのことである (Beateson, 1972)
- (3)フロアー：会話参加者の多数に認められている会話の場。シングルロアーは
Edelsky(1981)の2種類の分類の一つで、一人のフロアー保持の場を示す。
- (4)メンツ：敬語行動の論理的枠組みを示したBrown and Levinsonの研究での
Politeness (ポライトネス) で使用されているfaceの訳。敬語行動とはその
face (メンツ/面子) を守るために発話に応じた様々なストラテジーをとるこ
とを示す。

〈参考文献〉

- 足立さゆり (1995) 「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」 拓殖大
学日本語紀要 第5号 P73-87
- 井出祥子 (1998) 「敬語は何をするものかー敬語のダイナミックな働き」 日本語
学10号 特集 外界認知と言語 p55-68
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用ースピーチレベルシフト生
起の条件と機能」 昭和女子大学「学苑」662号 P27-42
- (1994) 「性差か力 (power) の差か-初対面二者間の会話における話題導入の
頻度と形式の分析によりー」 「ことば」15号現代日本語研究所
- 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能ー丁寧体と普通
体の使い分け」 日本語学 16.3 39-59
- 柏木成章 (1993) 『「である」と「だ」』 語学教育研究論叢 第10号 大東文化大学
P204-P219
- 窪田富男 (1990) 「敬語教育の基本問題(上)」 国立国語研究所
- 熊取谷哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と
「じゃあ」の談話分析」 日本語学 11.9,14-15
- 杉山ますよ (1998) 「進行役とゲストの発話にみられる繰り返し」 言語文化と日

本語教育 16号 46-58

藤井桂子・大塚淳子・杉山ますよ・森下雅子 (1998) 「討論におけるトピック移行の分析－日本人と学習者の比較から」－日本中韓豪の討論場面における会話分析
お茶の水女子大学 岡崎 眸研究室

牧野成一 (1996) 「常体と敬体－ウチとソト変換の文法環境」 「ウチとソトの言語文化学」 アルク p100-108

森下雅子 (1998) 「制度的な相互行為－日本語ボランティアグループのミーティング」 修士論文

茂呂雄二 (1991) 「教室談話の構造」 日本語学10.10,p63-72

茂呂雄二編 (1997) 「発話の型」「対話と知－談話の認知科学入門」 新曜社p47-75

吉田愛 (1996) 「『丁寧体』と『常体』の指標的機能について」 日本語学会12回大会予稿集

[英語の文献]

Brown, P. and Levinson, S. (1978) Universals in language usage : polite-ness phenomena. In Goody, E. N. (ed.,) Questions and Politeness : Strategies in social interaction. Cambridge University Press : 56-289

Watanabe, S. 1993 Cultural differences in framing : American and Japanese group discussions, In D. Tannen (Ed.) "Framing in Discourse" Oxford University Press.